2025 年度　社会学科

小 論 文

〔自己推薦ＡＯ（Ａ）〕　14－02

注　　意

1．監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。

2．解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

以下の文章は，社会学の入門書の第１章「世界は意味に満ちあふれている」の一部です。この章のむすび部分には，「意味の複雑な集積としての社会。多義的で，やっかいな存在としての社会。そんな社会を信頼し，ともに歩もうとするのが社会学だ，ということを見てきました」と書かれています（39頁）。以下の文章を読み，後の問いに答えなさい。

やっかいな問題

外形的な複雑さと意味の複雑さという二重の複雑さを身にまとった「社会」なるもの。この社会の性格は，社会における何らかの問題を解決しようとするときに，いつも立ちはだかります。社会における問題は，いつも「やっかい」です。

ホースト・リッテルとメルビン・ウェバーというアメリカの社会政策・都市計画の専門家が，1973年に「計画の一般理論におけるジレンマ」という論文を書き，その中で「やっかいな問題」(wicked problems）という議論の枠組みを提起しました。この論文が書かれる契機は，当時の「専門家批判」の高まりでした。福祉，環境，交通などさまざまな政策分野で専門家が半ば独占して政策を進めたことが，かえって人びとの生活を脅かしているのではないかという批判が，アメリカをはじめとした先進国で沸き起こります。そうした批判を真摯に受け止める中で，リッテルらは，そもそも専門家が科学的な見地から社会問題を解決することは可能なのか，と問いました。

リッテルらは論文の中で，現実の社会政策が対象としている問題，たとえば，都市犯罪や貧困の問題を，自然科学やチェスとの対比で考えます。数学も有機化学も，そしてチェスも――とリッテルらは言います――，対象とするものの枠組みがはっきりしていて，その中で問題を解くことができます。

それに対して，社会の問題，たとえば貧困問題の解決について考えたとき，それは最初から枠組みを決めて考えることができません。そもそも貧困とは何なのかがまず問われなければなりません。貧困とは低収入ということなのか。貧困が低収入のことだとしたら，それは国や地域全体の経済が低レベルだからなのか，あるいは，労働力市場の中での技能の欠如の問題なのか。貧困が技能の欠如の問題だとすれば，それは教育の問題なのか。教育の問題だとしたら，教育を改善するとはどういうことなのか。あるいは貧困問題は健康状態の欠如と関係があるのか，だとすればそれは保健医療の問題なのか。あるいは貧困は文化的な剥奪の問題なのか。

このように，貧困問題とはどういう問題なのかを最初に決めることはできないのです。それは，解決策を考える中で初めて定式化できるものなのだ，とリッテルらは言います。たとえば，教育の改善で解決しようと考えて初めて，貧困問題とは教育の欠如の問題であると定式化できます。しかしそれが問題のすべてではもちろんなく，また，解決策を全部列挙することも不可能です。さらにやっかいなこととして，何らかの解決を試みたとしても，そのことがまた別の問題を生みだします。何らかの解決が生みだす波及効果をすべて見定めることは無理であり，問題はいつまでもどこまでも広がっていきます。現実社会は閉じたシステムではなく，オープンなシステムだからです。現実社会は文化や価値観も多様だからです。

社会問題に解決はない

これが「やっかいな問題」です。科学やチェスには一つの最良の解答があるが，やっかいな問題にそんなものは「ない」，とリッテルらは喝破しました。科学は結局のところ，「飼い慣らされた扱いやすい問題」，答えが出るように最初から枠組みが決まっている問題を扱うように発展してきたのだ。しかし，現実の問題はやっかい（wicked）なのだ。だから――とリッテルらは言います――問題に解決はない。「社会問題は決して解決されない。すくなくとも何度も〈再解決〉されつづけるだけだ」。

1960年代以降のアメリカで，専門家による科学的な社会政策が花開こうとしていたその矢先，専門家が社会問題を診断することについて，大きな抗議が巻き起こりました。専門家が社会の「進歩」の方向を指し示すのに対し，大きな疑問が人びとから出されたのです。そんな人びとからの攻撃に対して，社会福祉の専門家も，住宅政策の専門家も，交通の専門家も，教育の専門家も，そして自然科学者たちも，免疫をもっていませんでした。そんな中でリッテルらはこの論文を書き，大きな反響を呼びました。

時が経って2000年代に入ってから，この「やっかいな問題」という問題提起は，とくに環境問題を論じるときにあらためてよく参照されるようになりました。よく，どころか，かなり頻繁に参照されるようになりました。リッテルらの論文がどのくらい引用されたのかを実際に見てみると，圧倒的に2000年代以降が多くなっています。1970年代に書かれた論文が近年再び脚光を浴びることになったというのはおもしろいことです。

（出典：宮内泰介『社会学をはじめる：複雑さを生きる技法』ちくまプリマー新書，2024年，22-26頁。ただし，年号を算用数字に変えるなど一部改変。）

問い　下線部の「社会問題は決して解決されない。すくなくとも何度も〈再解決〉されつづけるだけだ」とはどのような意味でしょうか。これについて簡単に説明した上で，あなたが「やっかいな問題」として思い浮かべる具体例を一つあげて，それについて，どのように「やっかい」であり，「〈再解決〉されつづける」のか，あなたの考えを述べてください。